

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

山(茶・みかん)と田(米・麦)を持つ大きな農家の長女に生まれ、農業に明け暮れる娘時代を過ごし、二一歳で焼津の漁師に嫁ぎ三人の子の母となる。結婚十一年目に「世界初の水爆犠牲者久保山愛吉氏未亡人」となり、涙の乾く間もなく原水禁運動の「時の人」として国際舞台へ。同時に三・一ピキニ水爆被災事件の政治的決着による補償金のため羨望、嫉妬の渦に巻き込まれ、茨の道を歩むことを強いられる。その中でもずっと夫の遺言を自らの信念として核兵器廃絶を訴え続ける。

私は焼津の教師として、久保山すすさんと接する中で、こうしたすすさんの歩み(道)を生徒達の平和教育教材としてまとめたいとずっと願っていた。

一九九二年、創立三十周年を迎えた静岡県平和委員会が記念事業の一環として「フジアザミ・シリーズパンフ」を編集・発行することを企画。その一冊として久保山すすさんの伝記(女性史)を焼津の私が担当した。

数年前の大手術後今も通院を続けて

## 「久保山すすさんの道」(仮題)を執筆して

飯塚利弘

いるすすさんは、三九年に亘る筆舌に尽せぬ御苦労のため七一歳より遙かに老けて見えるが、核兵器廃絶・戦争反対への情熱と語りは、実に明快で若々しい。それは92年3・1ピキニデー集会へのおこぼれ「『原水爆の被害者は、私を最後に』という夫・愛吉の悲願が達成される日が、私が生きていうちにくる——そんなふうに見えるときが来ました。どうか、爆発事故や放射能の災難を起こさせないように気をつけて、全ての核兵器を一発々々、残らず、なくして行ってくださいますように——」にもよく表れている。

長女みや子さんは「母は三度大きく変った」と言う。事件前の母はおとなしく平凡な主婦で人前に立って話せる人ではなかった。事件後渦中で揉まれる中で強くなり時に怖くさえ感ずる母になった。子供達には涙一つ見せなかつた。孫が生れてからはこの上なく柔和でやさしい「おばあちゃん」になった、と。

すすさんの心を深く傷つけたものの

一つに、一九六三年の墓前祭をめぐる「分裂」がある。見崎吉男さんは「あの時、すすさんを焼津においていいのかなあと真剣に考えた」と後に語った。この「分裂」を痛恨の思いで受止めた静岡原の人々は平和運動の強固な統一を実現させるために、ねばり強く闘争を積み上げ積み重ね、その中から「原爆許すまじ、分裂許すまじ」の『静岡の心』を生み出した。

そのひたむきな姿はすすさんの心の傷を癒し、冷たかった近所のお年寄りを「すすさん、あんたっちの原水爆禁止運動が平和を、孫達、子供達を守ってくれている。有難いと思っていますよ」と変えていった。

「本当に多くのおみなさんに支えられてこままでやって来ました。今も核兵器廃絶が早いかな、私の逝くのが早いか競争をしている思いです。元気がなくなってもう一度夢の島の福竜丸にも会いたいと思います」すすさんが目をやった庭に真紅の「久保山バラ」が風に揺れていた。

(第五福竜丸平和協会評議員)



あいつぐ小学校の社会科見学

テレビのマイクに「うん、すごい」

一九九三年の展示館は、休館中の元旦、「千人鶴の会」の青年たち三〇名が、久保山愛吉さんの記念碑の前で、新年の集いを開いてはじまりました。数年前から行われているもので、同会は毎月最初の日曜日に記念碑の前に集い、被爆者との連帯の決意を新たにしています。

小学校の社会科の見学は、一月十二日、葛飾区奥戸小学校を皮切りに、約六〇校、例年になく雨の多い日々元気いっぱい見学が

つづきました。

テレビ・新聞の取材も多く、一月二十日には、NHK首都圏ニュース番組の一つとして、女性キャスターが一日がかりで取材。第五福竜丸被災の内容と共に、船がいま何を訴えようとしているか、保存の願いがどう実っているかなど、こまやかに語りました。展示館を訪れた人びとが贈った、折鶴でつくった紙のふね、わりばしでつくった木造船、毛糸で編み出した船など、こどもたちの手作りの船が大石さんの模型とともに「熱い思いが伝わってくるようです」と紹介されました。

おりから見学中の埼玉県川口市芝富士小学校六年生八十名も、緊張の面持ちで説明を聞いたあと生徒の司会で船を前にして小さな「移動平和教室」。感想の発表、折鶴の贈呈に全員合唱と工夫がいっぱいです。差し出されるマイクにも「うん、すごいや」など明るく堂々と感想をのべていました。

茨城県の生協、横浜市生協、群馬県館林市子供会、京浜急行バスガイドさんの研修なども学校の見学

学の間際に次々に行われました。

### 展示館の修理工事

かつてヘドロの中に沈みそうになっていた第五福竜丸……。ちょうどその場所にいま東京都のマリーナの拡張工事が進み、展示館まえの広場につながるように波止場が作られるはじめました(四月オープンの予定)。夢の島公園もさらに大幅な改造計画が進行中で、展示館の拡充もその将来目標ですが、開館以来十七年が経ち潮風による傷みはこのほかひどく、応急修理の連続です。今年も一月いっばいかけて、窓枠と窓ガラスの取り替え工事が行われました。錆びたサッシュからしみ込んで、強い風雨の時は床に船が写るほど水溜まりをつくった状況も解消します。

展示館前広場一帯の排水工事もすすみ、久保山愛吉さんの碑のある広場は全面、芝生が植えかえられました。春には美しい芽を一齐にだすことでしょう。

### 協会理事会開く

一月二〇日、学士会館で協会の第一〇九回理事会が開かれました。小学校の社会科見学、中学校の修

学旅行など来館者が増加し、年間来館者もはじめて三〇万人を越えた昨年一年間の活動をふりかえり、新年度にむけての方針を審議。ピキニ事件四〇周年を前にして来年二月に記念シンポジウムを成功させるためにワーキンググループの設置を決め、内容の充実と組織へ一層の努力を重ねることにしました。今年の三・一ピキニ事件記念集会の日程・次第・記念講演者・演題等も別項のように決まりました。展示館の拡充についても建設局はじめ関連部局との折衝を今後をはかることにしました。三月二十四日に評議員会・理事会、五月二十六日に理事会を開催し、役員改選、新年度事業計画、予算、決算などを決定します。

●ご参加下さい

- 三・一ピキニ事件記念集会
- 主催 第五福竜丸平和協会
- 日時 三月一日(月)
- 会場 午後六時半〜九時 文京区民センター 3A会議室
- 講演 「核のおそろしさ」 小出昭一郎氏 「生活者とエネルギー」 藤原 房子氏
- 参加費 三百円

# 平和教育で平和な世界を 創造できるか②

藤田 秀雄

前号で、わたしは、ユネスコなどの平和教育論が、戦争や核実験のさらすものを教えることから、もう一步すすめることを求めているとのべた。もう一步とは、ひとびとが、連帯し、何らかの行動に立ちあがる教育をすることである。そうでないかぎり、平和教育によって平和な世界をつくりだせない。

ではこういう平和教育に、なにが必要なのか。まず考えられるのは、過去の、また現在の平和運動に学ぶということであろう。いいかえれば、戦争の被害と加害の学習に加えて、抵抗体験の学習が求められることである。

学ばないまま高校を卒業するのである。

平和のための思想と行動に学ぶことなしに、平和のための行動の意志はそだてられない。核兵器の問題については、第二次大戦後の世界のさまざまな反核の思想と行動を、若い世代に伝えていく必要がある。

しかしこの点で、日本の教育をふりかえってみると、日本の教育構造自身が、日本人を、みずから、問題解決のために連帯し、行動するのをはばむものになっていることも問われなければならないと思ふ。

わたしたちが、みずから行動する力をつけるためには、歴史に学ぶということ以外に、①想像する能力(イマジネーション)と、②連帯しようとする心と、③行動への意欲が不可欠であると思われる。平和な世界をつくるために行動するには、平和な世界とは何かを

イマジネートすることがまず求められる。また、どんな行動をすることが、どういう結果を生むかをイマジネートすることも必要である。平和のために、自分がどんな人生をおくるのかも考えなければならぬ。

しかし、いまの日本の学校教育では、ほとんど想像する能力は育てられない。学校教育の中心は、入試のための教育であり、大量の断片的な知識の獲得に莫大なエネルギーがつけやされる。

国語・国文の教科では、子どもたちは、さまざまな想像力をはたらかせ、その子どもなりの文章の解釈をすることがあってよいと思ふが、解答はあらかじめ定められている。定められたとおりの解釈をしないかぎり、その子どもは国語・国文の能力はないものとみなされる。それは、芸術関係の教育においても同様である。

しかも、塾とテストに追いまくられ、自分で本を読みたのしむ時間、ほとんどない。

こういう学校教育のなかで、イマジネーションのちからは育たないばかりか、幼児期や小学校低学年時代にあったその能力は、うば

われていく。

第二の、連帯の心は、はげしい偏差競争のなかで育ちようがない。子どもたちは、つねに偏差値が下がることにおびえている。もはや下位の偏差値から、脱しえないと感じた子どもは、欲求不満のはけ口を別のところへ向けるしか道はない。トップクラスの子どもでも、いつ自分の偏差値が下がるかもしれないということにおびえている。

こういう生活のなかで、ほとんどの子どもたちは、およそ自信というものをもちえなくなっている。第三の行動への意欲は、想像する能力にもとづく自己決定の能力と、自分についての一定の自信がなければ、育つものではない。諸外国の平和教育関係の論文では、セルフ・エスティメイト・エデュケーション(自信を育てる教育)が強調されている。日本の教育は、子どもたちを抑圧し、自信を喪失させる教育である。

日本の平和教育関係者は、こういう教育構造をどう改めるかという課題にも立ち向かわざるをえない。(立正大学教授)

# 光さんの音楽

久保 文

一九六二年の八月六日、私は廣島の平和公園の芝生に座っていた。

その前日に行われたソ連の巨大核実験をめぐって原水爆禁止世界大会が準備段階の会議でもめていて、本大会がなかなか開かれないので待っていたのだ。私のすぐそばには作家の大江健三郎氏と現岩波書店社長の安江良介氏も座っていた。何を話してあったのか、すっかり忘れてしまったが忘れられないことが起こった。大江氏が泊まっていたホテルから人が来て何かを告げて行った。それが何であったのか私は聞いたわけでは無いのに大江氏と安江氏が話しかけていられた様子から大江氏の赤ちゃんが生まれられたのだと思

その赤ちゃんは光と命名され既に二十九歳になっていられた。

一九九二年は健やかな年ではなかった。いろいろな原因による嫌なまた悲しい思いの連続の中で私を慰め救ってくれたものがあつた。それが大江光さんの作曲なのだ。

十月二十九日、銀座の山葉ホールで開催されたその作曲の演奏会に行き損なつた私は残念でならないのでCDになっているという作曲の演奏で無念の思いを納めることにした。そして生まれて初めてCDというものとそれからそのプレイヤーを買つた。狭い部屋の空間をあまりふさがないようにと小さいのを見つけて抱えて帰ってきて、早速聞いた。ピアノとフルートの合奏とピアノだけの演奏とで二十五曲入っている。聞き惚れてしまった私は人間というもの不思議さに唯々驚きしみじみと考えこんでいる。

私が年末、家にいるかぎりの毎日光さんの音楽で慰められそれ

以上心を清められるような思いでいた頃、ふとTVをつけると健三郎さん、光さんが現れた。「徹子の部屋」だった。その時、大江氏は光さんと音楽との出会いを話された。光さんがまだパパの肩ぐるまで北軽井沢で散歩していた頃

いろいろな鳥の鳴く声が聞こえた。その度ごとに「・・・が鳴きました」、また鳥の鳴く声が聞こえる。「・・・が鳴きました」と「・・・が鳴きました」という声が聞こえる。大江氏は最初空耳かと思つた。ところがそれが紛れもなく光さんの声だと云うことがわかつた。それが光さんが音楽の道に入るきっかけになつたのだ。知能障害によつて他の人との間に明らかにある言葉の壁を光さんは音楽によつて開いたのだ。

知能障害児は小学校のあととは、養護学校には入ることが出来るがそれで学校はおしまいなのだ。光さんの作曲の中に「卒業」という曲がある。私の聞いているCDにはそれが最後にいれてある。ピアノとフルートの合奏による見事な曲だ。大江氏の説明によると光さんは小学校卒業の時にも「卒業」を作曲し、また養護学校卒業の時

業)になつたのだ。大江氏はこのフルートのメロディーに詩をつけて家族で歌えるようにされたそうだ。

今日でおわりということ

不思議な気がするね  
不思議さ

風が吹いている  
風が吹いている

こぶしがゆれている  
こぶしがゆれている

卒業だ さよなら  
卒業だ さよなら

いつかふたりが会つたら  
いつかふたりが会つたら

ぼくだとわかるかな  
ぼくだとわかるかな

きみだと  
きみだと

大江氏の話によると養護学校の生徒は学校の構内以外で会つてもお互いが判らない。勿論卒業後に会つても判らない。光さんはお父さまと徹子さんの会話のかわりにいて殆ど表情を変えない。その表情の美しく清らかなこと。光さんが幼い頃、「ヒロシマ・ノート」などを書き続けていられた頃大江氏は会議が終わって二次会が終わると息子のみやげを買わなければと云つて茹でた豚足を持って帰られたことを思い出す。光さんの作曲の中にも「廣島のライクエム」がある。まさに無垢の光さんの曲なのだ。